

思ひ出づる身は深草を萩の葉の露にしをるるわが袂かな

きしゆ御前

『御伽草子』収載の物語「木幡狐」こはたきつねのなかの一首。歌意の説明の前に、まずこの物語について少し。

山城国、木幡の里(京都府宇治市)にきしゆ御前という年若い狐の姫君がいたという。優れた兄弟たちと比べても特別に見目麗しく、詩歌管弦によく通じていた。姫の噂を伝え聞いた人々はみな思いを寄せて熱心に文を送ったりしていたが、一向に取り合わなかった。

そうこうするうちに十六歳になったきしゆ御前が散る桜を稻荷山から見おろしていた時のこと。三条大納言の御子、三位の中将が花園で歌を詠んでいる姿が目に入った。光源氏、在原業平にも劣らない美貌の持ち主であったその青年を眺めながら、きしゆ御前はある決断をする。「私が人間だったなら、このような人と夫婦となるものを。よし、ひとまず人間の姿に化けて、一旦契りを結んでみよう」と。



大胆な姫は猛反対する乳母の少納言を連れ、十二単を着、美しい人間の女の姿になって山を下りた。

人間になったきしゆ御前を三位の中将は一目で気に入り、一晩の契りのはずが、晴れて北の方となることに。物事はとんとん拍子で進み懐妊、そして出産。そうして若君が三歳になる頃、若君の御遊び物として世に類なき逸物であった犬が献上されることになる。狐の天敵である犬。少納言も姫も身の毛もよだつ思いでそれを聞き、「此処を去るより他はない」と家の者が留守の隙に、若君を置いて逃げるように山へ帰ったという。その道中で詠んだのが冒頭の歌。歌意は「後に心を残しながら家を出たわが身は、深草の萩の葉が露にしおれているように、涙で袂を濡らすことだ」。愛する者との別れを嘆く和歌としてとりわけ秀でた歌ではないかもしれない。しかし、きしゆ御前が狐であることを踏まえると「深草」の青い匂いや「萩の葉の露」が体毛に擦れる冷たい感触がありありと想像されてくる。多く題詠で詠まれた和歌において、物語といえど体感を伴った悲しみの深い一首と思う。

(小島なお)